

## M・オークショットの政治思想 -保守と創造-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 陽征 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19688">http://hdl.handle.net/10291/19688</a>

2017 年 1 月 27 日

## 「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 政治経済学部 専任教授

氏名 重田 園江 ⑩

(副査) 政治経済学部 専任教授

氏名 高橋 一行 ⑩

(副査) 政治経済学部 専任准教授

氏名 川嶋 周一 ⑩

(副査) 国土舘大学 政経学部 専任教授

氏名 中金 聡 ⑩

1 論文提出者 氏名 松井 陽征

2 論文題名

(邦文題) M・オークショットの政治思想——保守と創造——

(欧文訳) Conserving and Creating : On the Political Philosophy of Michael  
Oakeshott

3 論文の構成

本論文は、序および第一章から第四章、そして終章の六部構成よりなる。そのうち第一章と第二章がオークショットのホッブズ論を、第三章と第四章が『政治における合理主義』と『人間行為論』における合理主義批判と伝統の議論を扱っており、大きく分けるならば、前半・後半の二部より構成されている。本論文の目次は以下のとおりである（細目次は略する）。

序

1. 研究史における位置づけ
2. human achievement
3. 各章構成

第一章 オークショットのホッブズ義務理論解釈——反＝自然法

はじめに

1. 政治哲学史の伝統——「旧序説」のフレームワーク
2. 自然法批判としての「旧序説」

3. 「モラル・ライフ」論稿の義務理論
4. 「新序説」の義務理論——まとめに代えて

## 第二章 代表——「人間が意図的に創造する秩序 human achievement」

はじめに

1. 問題の所在——自然法否定の帰結
2. 公民法と道徳的義務
3. 絶対的意志としての個人
4. 権威と代表——本人としての個人と代理人としての個人という構造
5. 残された問題——まとめに代えて

## 第三章 「合理的行為」論——アクティヴィティと人間秩序

はじめに

1. 近代合理主義の「合理性」概念
2. 行為への根本的問いかけ——近代合理主義批判に通底する問題意識
3. アクティヴィティと行為
4. 「人間行為の積み重ねにより生成された秩序 human achievement」としてのアクティヴ

イティ

おわりに

## 第四章 オークショット政治思想における「伝統」概念の解釈

はじめに

1. オークショットの「伝統 tradition」概念について——不可思議な「伝統」概念
2. 不可思議な「伝統」概念の解釈
3. オークショット・科学・ポランニー
4. ポランニーの科学活動論
5. オークショット「伝統」概念再考——ポランニーの科学論を通じて

## 終章 『行為論』における「人間が創る秩序 human achievement」の意義

はじめに

1. 権威と形式的ルール——〈近代的なもの〉＝〈立法的なもの〉の極限
2. 日常言語としてのプラクティス——〈中世的なもの〉＝〈司法的なもの〉に含まれる〈近代的なもの〉＝〈立法的なもの〉
3. 〈立法的なもの〉と〈司法的なもの〉の融合

おわりに

文献

### 4 論文の概要

本論文は、M・オークショット(Michael Oakeshott, 1901-1990)の政治思想についての研究である。オークショットの思想はきわめて難解である。晦渋な英語表現、さまざまなほのめかし、否定表現の多い文体、独特の術語の使い分け、そして過去の発言と正反対に見える断言など、安易な解釈を寄せつけない、いわばハードルの高い思想家である。

本論文は、こうしたオークショットの政治思想に一貫するテーマを、まず「人間が創る秩序

human achievement」の追求として提示する。そしてそれをさらに「立法的なもの」「司法的なもの」の二つに分け、これらをそれぞれ、human achievement 中の「人間が意図的に創造する秩序」および「人間行為の積み重ねにより生成された秩序」として理解する。「人間が創る秩序」はこれら二つの側面を兼ね備えつつ、全体として自然・理性・神などの「不変的なもの」に対立している。これが本論文でのオークショット思想理解の図式である。以下、この図式のもとに各章で展開された議論を概観する。

序は、オークショット研究史を概観しながら、本論文の特徴を明らかにした章である。このなかで、先行研究が詳細に取り上げられ、オークショット研究が彼を「ヘーゲル主義者」とする見方から「ホブズ主義者」とする見方へと大きく転換してきたこと、また近年では彼の保守主義がどのような内実を有するのかについて、政治的なレッテル貼りを相対化するかなり繊細な議論がなされていることが示されている。それとともに、本論文の特徴である、human achievement の思想家としてオークショットを捉えるという像が予備的に提示されている。

第一章、第二章は、上記の二つの側面のうち、「立法的なもの」あるいは「人間が意図的に創造する秩序」の側に焦点を当てた部分である。

第一章は、オークショットにおいて、政治社会が「自然」とは対立することを示した章である。彼のホブズ義務理論解釈を取り上げることで、それが「反＝自然法」として特徴づけられることが示される。ホブズにおいて義務は自然によって基礎づけられるものではなく、政治共同体だけが人々に義務を強いるということを、オークショットはなぜあれほどまでに強調したのか。そこにはオークショットが「モラル」という言葉にこめる意味、それを「ナチュラル」と対比させて用いるときに込める独自の含意が関わっている。オークショットにとって、人間とはモラルな存在であって自然な存在ではない。そしてモラルな世界を保証するのは法である。法共同体としての政治共同体だけが人々に義務を課すというホブズ読解を通じて、オークショットが政治社会と法の独自性、秩序の「人間が創るもの」としての側面を明らかにしていることが示される。

第二章は、ホブズ政治理論における「代表」概念を中心に、「人間が意図的に創造する秩序」としての政治共同体がどのように設立されるのかを示した章である。代表に注目するホブズ読解は近年流行しているが、オークショットの時代にはほとんど見られなかった。そのため彼のこだわりの意味が理解されるようになったのも最近のことである。この章では、ゲレンサー、トレゲンザなどの先行研究を参照しつつ、ホブズにおける代表の意味をオークショットがどのように理解し位置づけたかを明らかにしている。

ホブズは代表 representation 概念のうちに「自分自身を代理し表象する re-present」という特性を見出し、それによって権威創造を説明している。そこでは、権威 Authority の著者 Author が代表される者、すなわち代表を選出する者であるという理屈を用いて、人々の自由意志による約束（契約・信約 covenant）によって名指された主権者の行為は、信約締結者の行為そのものである、という権威論が打ち立てられている。これによってホブズは、一方に主権者の権威としての絶対性 sovereignty を、他方に信約を締結する個々人の意志の自由を置き、それらを両立させようとした。これが本当にうまくいっているのか、意志の自由を起点として近代国家における個人の位置を確保することができるのかは諸説あるが、この章では、オークショットがこうした代表、権威、信約といった概念装置の読解を通じて、ホブズ政治理論に

おける権威と自由の両立の契機を模索したことが確認される。

第三章、第四章は、**human achievement** のうち、「司法的なもの」あるいは「人間行為の積み重ねにより生成された秩序」の側に焦点を当てた部分である。

第三章は、オークショットの合理主義批判の読解を通じて、近代合理主義に代わって彼が主張する人間行為を規定するルールあるいは規範のあり方について論じている。オークショットは近代合理主義を、それが予め目的を定め、最短でゴールにたどりつくことを最も合理的であるとする思考様式として捉える。さらに近代合理主義は、人間行為をそのような思考様式にしたがって合理的行為／非合理的行為へと分類する。

オークショットによると、人間行為を規定するルールや規範、人がそれに則って行為している何らかの秩序は、そのような目的－手段関係によって捉えることはできない。この章では、上記のようなオークショットの合理主義批判を概観したあと、ではそれに代わるどのような行為観、秩序観が打ち出されるのかが考察される。その際、「アクティヴィティ」という用語に注目し、それが行為を、あるルールの共同体（集合体）のようなものの中で捉えるために用いられたことを示している。それによって、人間行為を司る合理性が多元的で多様であって、行為の目的はあらかじめ設定されておらず、個々の行為の積み重ねによってアクティヴィティが人間的秩序として徐々に生成・変容するプロセスであることがわかる。この論点が、次章の伝統論へとつながっていくことになる。

第四章は、オークショットの伝統概念が、通常の伝統擁護におけるのとはかなり異なった用いられ方をしている、という議論からはじまる。そしてオークショットの用法をよりよく理解するために、同時代に科学論・科学哲学を論じたマイケル・ポランニーの知識論との類似性を見出している。ポランニーにとっての科学は、一直線に真理に向かって突き進む目的論的な営為ではなく、過去に作られてきた科学共同体の文法を習得した人々によって、その文法を駆使しつつ新しい成果を求めて発見と創造をつづける共同行為である。

オークショットはこうした科学観と類似のものを、伝統概念の中に読み込んでいる。合理主義、自然主義、目的論的哲学に彼が対置するのは、過去から得てきた文法、あるいはイデオロムを受け継ぎながら、それを未来へと手渡していく個々人の共同的な営為である。それこそが伝統であり、そのなかには過去からの遺産の継承と同時に、その運用者である個人の行為による改変と部分的創造や付加が見出される。オークショットはしばしば保守主義者と呼ばれてきたが、彼の保守主義とはこのような意味のものであり、伝統の集合性、可変性、個人と集合体との相互性などの複雑な含意を持つ。そうした点を明らかにするなかで、オークショットにおける個人の自由と全体秩序という問題に、一応の決着を見るのがこの章の内容である。

終章は、後期オークショットの代表作である『人間的行為論』を取り上げ、改めて **human achievement** の問題を考察している。そして、オークショットが『人間的行為論』において提示した「プラクティス」という概念が、それ以前の「伝統」に代わりキーワードとなっており、その中にこの論文で示してきた「立法的なもの」と「司法的なもの」の両方が含まれていることが示されている。それによって、オークショットの思想全体を **human achievement** について描かれたものとして、さらにその中に「立法的なもの」と「司法的なもの」の二つの側面を含むものとして描くというこの論文の構想が、彼の思想の最終形態の中に見出されることが確認されている。

## 5 論文の特質

すでに述べたように、オークショットの思想は非常に難解である。しかも独特の用語を使うので言いたいことが分かりにくい。本論文は、彼の思想的営為を **human achievement** としての政治共同体のあり方を追求するという、一貫したテーマを持ったものとして捉えるところにきわだった特質がある。また、オークショット思想の中の判別不能であったさまざまなターミノロジーや主張を、「立法的なもの」と「司法的なもの」のいずれかに属するものとして区分し、あるいはどちらにも分類不能な諸問題を析出するための手がかりを与える、非常に説得力ある図式を構築したと考えられる。その点でこれまでのオークショット研究には見出せない視座を提供している。

また、オークショットのホッブズ読解を通じて、ホッブズ政治理論にとっての根本問題の一つである自由と権威の両立というテーマに迫っている。これは、オークショット研究にとどまらず、ホッブズをどのような意味で「近代的」とであると捉えるかに関わる意義深い点である。

さらに、保守主義をめぐっても示唆深い考察を行っている。これは「オークショットは保守主義者か」という問いに一定の解答を与えるだけではない。近年注目されるようになっている、保守主義という政治的ポジション、あるいは保守主義思想そのものについて一つの理解を提示することになっている。

## 6 論文の評価

以上のような点から、本論文はマイケル・オークショット研究として高い水準に到達しており、また当該研究の今後の議論において一つの軸あるいは参照点を提供するものとなっている。審査委員からも、この点に関して優れているとの評価が与えられた。

反面、すっきりした図式化を優先するあまり、二分法的な読み方が先行し、一種のテロス・ストーリーになっていないかという点が指摘された。このことは、たとえばホッブズを扱う第一章、第二章と、第三章以降の議論のつなげ方として、言い換えれば権威と自由の両立をめぐる議論から合理性批判への移行をめぐる、図式化する視点から過度の読み込みがなされていないか、といった事柄に関わる。また、人間の自由と創造についての議論は、全体の中でどのように位置づけるのかについての論証の弱さも指摘された。

しかし、初期からほぼすべてのオークショットの論考を読み尽くし、過去の研究文献を細かく参照したうえで、できるかぎり整合性を見出せる図式をつくり出している点、それによってオークショット思想の真髄を示そうとした点、またその試みがかなりの程度成功しており、思想家論として完成されているという点では、審査委員の間で評価が一致した。そのため、博士論文として十分に資格を有するものと認められた。

## 7 論文の判定

本学位請求論文は、政治経済学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（政治学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上